

【心ここに在らざれば見れども見えず】

この言葉は、四書の一つ“大学”に見えるものです。「心を正す」ことの大切なことを説いている文の中に見えます。正しくは「視れども見えず」で、このあと「聴けども聞えず、食らえどもその味を知らず」と続いています。

“見”という字は、目と“心(古い字は人と全く同じで見という形)”とで作られ、「人における目の働き」ということで“みる”ことを表わした字です(こういう成り立ちの字を会意字と言います)。だから「見ようという意志がなくても、目を開いていれば目に入ってくる」という見方が、この“見”のみるという字です。

“視”は、神の意味の“ネ”がありますので、祭祀にあたって手落ちのないように「注意して見る」ことを表わした字です。従って、この字は“見える”という使い方は出来ません。

“看”という字がありますね。“𠬞”は手という字の変形したもので、目の上に手をかざした形です。だからこの字は「見ようと思って見る」という意味の“みる”です。従って、この字も“見える”という使い方は出来ません。

“観”という字は、「心をこめて見る」という意味の字です。“観察”“観光”というように使われます。ついでに言いますと、「心をこめてさそう」のを“勧誘”と言い、「心をこめてもてなす」のを“歓待”と言います。

“審”が、“カン”という読み方と「心をこめる」という意味を持っているのです。

さて、この諺の意味は、「関心のないことには、注意して見たつもりでも実は目にとまらず、注意して聞いたつもりでも実は耳に残らず、物を食べてもその味がわからない」ということで、五官の働きは、心が正しく働いて初めてその用をなすことを説いたもの。

一般に、目は物を見る道具、耳は音を聞く道具、舌は味をみる道具とされていますが、実はほんとに“見る”ところ、“聞く”ところは脳なのです。目も耳も舌も、刺戟を受けいれ、これを脳に送り届けるだけの働きをしているに過ぎません。その刺戟を最終的に受けとめてこれを判断する所は脳です。つまり、心の働きなのです。だから、心が正しく働かないことには、目も耳も舌もその働きを発揮することは出来ないわけです。

私たちは、子供の教育にあたって、この諺をよく念頭におく必要があると思います。子供の関心の全くない時に、また、関心の全く持てそうもないことを、一方的に教えることに努めても、全く効果は得られない、ということです。

子供の心を無視して、一方的に教え込もうとする親の、世に何と多いことでしょう。そうすることは効果がないばかりでなく、親子の関係を悪化させます。心しなければならぬことだと思います。